

第三十一回村研大会 開催地の横顔 (3)

— 久慈の川瀬の妻恋い河鹿

鳴けばなつかし湯のけむり

大子湯の里 岩間の桜 —

第三十一回村研大会の開催地茨城県久慈郡大子町は、村研大会にふさわしく「湯の里」です。過ぐる大会開催地のなんと温泉地の多いこと、温泉めぐりの感がありません（研究通信「一二七号」）。はてしなき議論の後に、冷めたるす苦いコーヒーを啜るより、疲れた心身を癒すにはやはり湯浴みが一番なのでしょうか。

大子湯の里は、大子・袋田・湯沢の三つの温泉郷と浅川・山田の湯からなり、大会会場の「ホテル奥久慈」は大子温泉郷の一隅にあります。大子温泉郷は、一九六〇年代前半に観光開発の一環として開発されたのですが、袋田・湯沢の開湯は古く、とくに袋田の湯は「田毎の湯」とも呼ばれてきました。が、日本三大瀑布の一つといわれる「袋田の滝（四度の滝）」をひかえながら、近世以来昭和初期に至るまで湯治場として存続してきたに過ぎません。近世の時代には水戸藩の支配者たちが、明治になってからは、時折り滝見物に訪れる「文人墨客」が利用するだけでした。

水戸藩といえ、この地を支配していた佐竹氏の秋田移封直後におこった、年貢徴集をめぐる村民が殺戮され、記録も抹殺された水戸藩最

大の恥部、「生瀬の乱」の舞台も大子町域内です。

さて袋田の湯が脚光を浴びるのは、明治末から大正期で、政友会の地方政策である鉄道敷設が、この地方の重大な関心事となってからです。

昭和二年に水郡線の袋田・大子の両駅が開通しますが、この間、住民を巻き込んだ鉄道誘置運動は、地域の政治的な編成替に大きな役割を演じました。

鉄道の開通は、木材、木炭、薪を中心に、葉煙草、楮、蒟蒻などの大量輸送と販売を可能とし、大子地方の農林業の発展を著しく促しました。「素顔（2）」で紹介された「農村演劇（栄えゆく村）」も、こうした条件にも支えられていたようです。

それから約半世紀、いま大子町には、「農業切り捨て政治」の高浪から農業を守り、新しい生活と生産点を切り拓こうとしている人たちがいます。一方、半世紀にわたって、経済的、精神的な「交通」手段であった水郡線が大幅に縮小されようとしています。歴史の皮肉でしょうか。

「農政と村落」を課題とする今次の大会、せめて、開催地が抱えている現代の課題に思いをめぐらしていただけるような湯浴みの場となれば、「文人墨客」ならぬ村落研究者を多数お迎えする会場設営者の一人として真利に尽きるのですが……。

（桜庭宏会員）